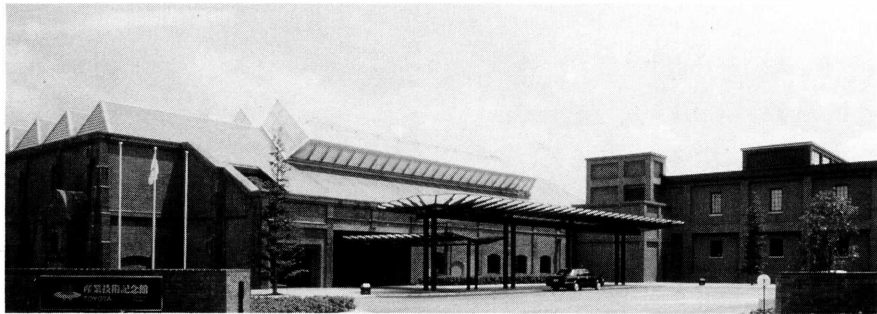


産業技術記念館



所在地 名古屋市西区

所有者 トヨタグループ (13社)

建物用途 博物館 (現在) 紡績工場 (改修前)

設計者 (株)竹中工務店

竣工 1912年

施工者 (株)竹中工務店 (株)大林組

改修 1994年

清水建設(株) (株)伊藤工務店

〈審査評〉 鋸屋根と木造トラス、外周のレンガ壁からなる旧建物は豊田佐吉が自動織機の開発にともなう実験工場として、1912年に開設され、後に規模を拡大して豊田紡績本社工場として往時の産業を担ったものである。大正、昭和初期の生産施設が、これだけの規模で現存することは珍しく、1987年、日本建築学会の調査を機に保存再生が図られる事となり佐吉翁の物造りの心を伝える産業技術記念館として、再生されたものである。運営は今や13社となったトヨタグループ企業の拠出金によっているという。

歴史的な建築を再生するとき、既存の建築を評価し、受け継ぐものを特定する確かな建築家の目が求められる。

大正、昭和に亘って中庭を囲んで増築された建築群は、回遊式構成の記念館にそのまま受け継がれている。塵突の遺構や、地下を走っていた集塵用の巨大な暗渠は中庭を囲むレンガに、組積造なるが故の遺構の痕跡を伝えて、単純化された中庭空間に、時間の経過をとどめている。

良いものは残し、中途半端なものは手を加えて再生するという事はたやすい事ではないが、ここでは成功している。

幅120 m あった紡績工場は、60 m に縮小されているが、その一方で、鋸屋根の下の高い空間や天窓の柔らかい北採光を生かす木造トラスの補強方法、照明計画の工夫、ピニング工法による鉄骨補強で風合いのあるレンガ壁を残すなど、行き届いた配慮がなされている。

傷みのひどかったエントランス部分は外周壁を残して大幅な改修が施されている。屋根の鋼板段葺きやトップライトなど新旧の対比と程よい調和を創り出すことにも成功している。

施主の明快な意識と熱意に支えられ、この記念館が永くその目的を果たす期待があるということも、受賞にふさわしい点と考える。